

「ベテスダの池での癒し(2)」

§ 049 ヨハ5:19~47

1. はじめに

- (1) 難解な箇所であり、困難を覚える。
- (2) 口伝律法の中の安息日に関する論争が始まる。
 - ①38年間病気であった人の癒しをきっかけに、論争が始まる。
 - ②§49~51まで、安息日論争が続く。
- (3) A. T. ロバートソンの調和表
イエスは、安息日に病人を癒し、パリサイ人たちに対して自らの行動を弁護する。
(§49) (今回は、5:19~47を取り上げる)

2. 論争のポイント

- (1) ヨハ5:18
「このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである」(ヨハ5:18)
 - ①イエスは、自分が神であると主張した。
 - ②パリサイ人たちは、これは冒瀆罪に当たると判断した。
 - ③それに対して、イエスは反論した。
- (2) 判断の難しさについて
 - ①商品広告
 - ②裁判(鳥取不審死裁判。2名を殺した罪で死刑。状況証拠しかない)
 - ③総選挙
 - ④きょうは、裁判員になったつもりで、聞いて欲しい。

3. アウトライン(ヨハ5:19~47)

- (1) イエスと父は一体(19~29節)
 - ①行動において
 - ②愛において
 - ③権威において
- (2) 4つの証拠(30~47節)
 - ①バプテスマのヨハネ

- ②奇跡
- ③父
- ④聖書

4. メッセージのゴール

- (1) イエスを誰だと言うか。
- (2) イエスを信じる者の幸いとは何か。

このメッセージは、イエスの業と主張について考えようとするものである。

I. イエスと父は一体である (19～29 節)

1. 行動において

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行うのです」(19 節)

- (1) 一般的な親子関係において、これが言える。
(例話) 中村勘三郎と2人の息子(勘九郎、七之助)
- (2) ここでの「子」とは、絶対的な意味での「子」である。
 - ①英語では、「The Son」である。
 - ②定冠詞があり、Sが大文字である。
- (3) 「子」には、自己判断による行動はない。
 - ①父がしておられるように、子もする。
 - ②38年間病気だった人の癒しは、父の御心であった。

2. 愛において

「それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。また、これよりもさらに大きなわざを子に示されます。それは、あなたがたが驚き怪しむためです」(20 節)

- (1) 父と子の愛の関係
 - ①完全な愛の形がある。
 - ②愛の関係に基づいて、父は子に自分の思いと行動を子に示す。
- (2) 愛という動詞

①ヨハ3:35では、アガパオウが使われている。

「父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった」

②ヨハ5:20では、フィレオウが使われている。

③ヨハネは、父と子の愛の関係を描写するために、両方の動詞を使っている。

(3) 「さらに大きなわざ」

①肉体の癒し以上のもの

②魂の癒し

3. 権威において

「父が死人を生きし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました」

(21～22節)

(1) 死、いのち、裁きなどは、神の主権に属する事項である。

①ユダヤ人の日々の祈りの中に、「死者を甦らせる神」という言葉がある。

(2) イエスは、父の代理人(シャリア)として行動している。

①ユダヤ教は、法的意味での代理人という概念を受け入れていた。

②父の代理人であるがゆえに、父と同じ権威を持って行動する。

③三位一体の教理では、イエスは父と同じ神性を持つ。

④しかし、イエスは父とは異なった位格(person)を有し、父に従順である。

(3) 永遠のいのちは終末的概念であるが、すでに実現した概念でもある。

①イエスを信じる者は、すでに永遠のいのちを得ている。

(4) 裁きもまた、終末的概念である。

「また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです。このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです」(27～29節)

①「人の子」とは、ダニ7:13～14に登場するメシアの呼称である。

②「人の子」は、メシア王国を統治するようになる(裁きも含まれる)。

③すべての人に復活の時が来る(ダニ12:1～2)。

④この箇所は、業による救いを教えているのではない。

*ヨハネの福音書の教えは、新生による救いである。

*新生した人は、善行という実を結ぶようになる。

- ⑤この箇所は、2種類の復活について教えている。
- ⑥聖書の他の箇所の教えを参考に、復活についてまとめてみる。

*信者の復活は、2段階で実現する。

- ・携挙
- ・地上再臨

*不信者の復活は、千年王国の終わりに起こる(黙20:11~15)。

II. 4つの証拠(30~47節)

はじめに

(1) イエスは、忠実な代理人として行動している(30節)

- ①モーセや旧約聖書の預言者たちは、神の代理人と見なされた。
- ②神の権威に支えられた奉仕である。

(2) 31~32節

「もしわたしだけが自分のことを証言するのなら、わたしの証言は真実ではありません。わたしについて証言する方がほかにあるのです。その方のわたしについて証言される証言が真実であることは、わたしが知っています」

①イエスは、旧約聖書の原則を紹介している。

*死刑に処する場合、2人、または3人の証言が必要(申17:6、19:15)。

②「証言する方がほかにある」とは、神を示す婉曲語である。

1. バプテスマのヨハネ(33~35節)

「あなたがたは、ヨハネのところの人をやりましたが、彼は真理について証言しました。といっても、わたしは人の証言を受けるではありません。わたしは、あなたがたが救われるために、そのことを言うのです。彼は燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で楽しむことを願ったのです」

(1) ヨハネは真理について証言した。

- ①イエスを「世の罪を取り除く神の小羊」と呼んだ(1:29)。
- ②イエスは、人間の証言を必要としない。
- ③しかし、聞いている人たちが救われるために、ヨハネを証人に出している。

(2) 「燃えて輝くともしび」

- ①手持ちの燭台、ランプ
- ②ヘロデ時代のランプは小型で、ろうそくの灯程度の光しか発しなかった。

③ヨハネがいかに偉大だったとは言え、その影響はわずかであった。

2. 奇跡 (36 節)

「しかし、わたしにはヨハネの証言よりもすぐれた証言があります。父がわたしに成し遂げさせようとしてお与えになったわざ、すなわちわたしが行っているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わしたことを証言しているのです」

(1) イエスが行った奇跡は、ヨハネの証言よりもすぐれた証言である。

①父の御心に沿った業である。

(2) 「わざ」は複数形になっている。

①いくつもの奇跡があった。

②ベテスダの池での癒しは、そのひとつである。

③最初のメシア的奇跡は、ユダヤ人のツァラアト患者の癒しであった。

3. 父 (37～38 節)

「また、わたしを遣わした父ご自身がわたしについて証言しておられます。あなたがたは、まだ一度もその御声を聞いたこともなく、御姿を見たこともありません。また、そのみことばをあなたがたのうちにとどめてもいません。父が遣わした者をあなたがたが信じないからです」

(1) イエスがヨルダン川から上がると、天から声がした。

「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」(マタ3:17)

①イエスに必要なのは、天父の証言だけである。

②パリサイ人たちは、天父の声を聞いたこともなく、その姿を見たこともない。

(2) シナイ山の麓にいたイスラエルの民は、シャカイナグローリーに触れた。

①彼らは、仲介者モーセを通して、神のこばを受け入れた。

②しかし、それ以上の啓示(御子)が与えられたのに、イエスと同時代のユダヤ人たちは、その方を信じない。

4. 聖書 (39～54 節)

(1) 39～40 節

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません」

①聖書には「〇〇をせよ。そうすれば生きる」と教えている箇所がある。

*申30:6参照

- ②ラビたちは、「〇〇をせよ。そうすれば来たるべき世で生きる」と解釈した。
- ③「聖書の中に永遠のいのちがある」とは、そういう意味である。
- ④イエスは、その聖書が自分について証言しているという。

*旧約聖書は、メシア預言で満ちている。

- ⑤従って、イエスを拒否することは、聖書を拒否することである。
- ⑥彼らは、口伝律法という眼鏡を通してしかモーセの律法を解釈できなかった。

(2) 41～44節

- ①父の代理人は、父の名によって来た。
- ②代理人を拒否することは、その人を遣わした方の権威を拒否することである。
- ③イエスを拒否することは、父を拒否することである。

(3) 45～47節

- ①彼らはモーセ(五書)を信じると言うが、そのモーセが彼らを訴える。
- ②なぜなら、モーセはイエスについて証言したのだから。
- ③イエスを信じないということは、モーセを信じないということである。

結論

1. イエスを誰だと言うか。

- (1) イエスは、自分が神であるという主張をしていない。
 - ①これは、事実反する。
- (2) イエスは、自分が神であると主張した。
 - ①イエスは、嘘つきであり、詐欺師である。
 - ②イエスは、誇大妄想狂か、精神異常者である。
 - ③イエスは、事実そのようなお方である。

2. イエスを信じる者の幸いとは何か。

- (1) 父と子は、愛において一体である。
 - ①「キリストの内にある」とは、父と子の愛の交わりの中に置かれていること。

(2) ロマ8:38～39

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」

- ①(例話) 幼児期の父親との関係が問題という方への助言